ひょうご水百景

No.141　黒岡川（丹波篠山市）

～篠山城の防御線・黒岡川流路の変遷（2）～

写真-1 熊谷大橋から藤岡川と新黒岡川の合流点を撮影（平成27年5月）

■ 無理が祟って浸水被害が頻発 ⇒ 戦後、直角流路を解消

上の写真-1 は、新黒岡川（黒岡川から藤岡川への放水路）が藤岡川に合流するところを、藤岡川に架かる熊谷大橋（くまだにおおはし）から撮ったものです。篠山城築城時に城の南の防御線とするため直角に曲げられた黒岡川は、治水上かなりの無理を抱えていて、屈曲部周辺の南新町とその西側一帯は、大雨が降るたびに浸水被害に見舞われていました。

県は、昭和 24（1949）年度に着手した篠山川中小河川改修事業において、直角に曲げられた黒岡川の流路を元の流路に戻すこととします。小川橋（こがわばし）よりまっすぐに篠山川へ切り落とすこととし、昭和 26（1951）年８月４日工事は竣工しました。併せて、切り落とし工事により南新町が東西に分断されたため、付帯工事として新開橋（当時は木橋）が架設されました。

なお、黒岡川は、昭和 11（1936）年に県費支弁河川に編入されています。（準用河川指定は昭和 15 年２月３日）

写真-2 篠山川への合流点付近に架かる新開橋

写真-3 旧黒岡川は、新町橋右岸のケヤキの木付近から直角に曲がっていた

■ 黒岡川旧河道を埋め立て「歴史の散歩道」に

黒岡川をまっすぐ篠山川に合流させることで廃川となった南外堀沿いの旧黒岡川は、長い間放置されたままでしたが、平成３（1991）年に埋め立てられ、遊歩道として整備されました。「歴史の散歩道」と命名された遊歩道の西の端には説明板があり（写真-4）、そこには右下のような説明が書かれています。

写真-4 「歴史の散歩道」沿いにある説明板

歴史の散歩道

築城の際、東方を流れている黒岡川を小川橋の南で西の方向へ直角に曲げ、北岸一帯に竹を植えて、南より篠山川・黒岡川・外堀・内堀と四重の防御線を構築しました。

この流れは不自然で、これから南の地域は度々水害を受けました。そこで、昭和二十六年に元のように篠山川へ切り落とし廃川としたのです。最近、その旧川床が遊歩道として整備されたものです。北側の竹林には、珍しい「雲紋竹」が生え、付近に厩があり、南側は藩の馬場でした。

篠山市

「歴史の散歩道」の説明文

また、城の東を南北に走る市道と旧黒岡川が交差する場所には、かつて「新橋」という橋が架けられていました。廃川後、橋は撤去されましたが、その親柱４基が元あった場所近くに置かれています。そのうちの１基には、「昭和七年十二月架」と刻まれています。（写真-6 参照）

写真-5 『歴史の散歩道』（旧黒岡川跡）

写真-6 親柱『昭和七年十二月架』

写真-7 親柱『しんばし』

■ 丹波篠山市街地を流れる黒岡川の治水上の課題

昭和 26（1951）年に屈曲部が解消された黒岡川ですが、狭小な河積ゆえにその後も浸水被害がしばしば発生していました。抜本的な改修を望む声が大きくなりますが、沿川には人家が連担していて、現川拡幅はきわめて困難な状況でした。加えて民有護岸と思しき箇所が多々あり（写真-8・9・10 参照）、その上には多くの場合家屋や塀が建てられています。そのため、洪水によって河床が洗掘されて護岸が不安定になっているような箇所については、河川管理者（県）がやむを得ず既設護岸に根継工を施しています。

写真-8 小川橋上流の黒岡川護岸の根継工

写真-9 門前橋下流の黒岡川護岸の根継工

写真-10 門前橋上流の黒岡川護岸の根継工

根継工はコンクリート面が滑らかであることから粗度係数が小さくなり、根継工設置に伴い流速が設置前より速くなることで、根継工付近の土砂が流出しやすくなります。特に、川幅の狭い河川での根継ぎは、河川断面が小さくなることと併せて、河床低下を生じやすくなることから、安易に根継工を採用することは避けるべきです。黒岡川の場合は、民有護岸ということでやむを得ず根継工を採用したのでしょう。

■ 現川拡幅が困難なことから黒岡川の洪水の一部を藤岡川に分派する放水路を整備

市街地を流れる黒岡川の改修は、沿川に人家が連担していて拡幅が困難なことから、昭和 56（1981）年に抜本的な治水対策として、黒岡川の洪水の大部分を藤岡川に分派する放水路（新黒岡川）を整備することになりました。

黒岡川からの流量増に対応する藤岡川の改修および新黒岡川の開削については、昭和 24（1949）年度に着工した篠山川中小河川改修事業の一環として実施されたもので、昭和 54（1979）年度に着工し昭和 57（1982）年度に完了しています。

これらの工事は当時、篠山川沿岸一帯で大規模に行われていた篠山川沿岸土地改良事業※1と調整しながら進められました。

放水路による分派計画は、超過確率 1/30 の流量 115m^3/s を新黒岡川に 95m^3/s、黒岡川に 20m^3/s 分派するもので、分派点の新黒岡川左岸堤防には、写真-15 のようなオリフィスが設けられて、ここから黒岡川に分派されるようになっています。

新黒岡川の延長は 566m で、その両岸には桜が植えられています。また、分派点近くには「新黒岡川」と刻まれた石碑（写真-12）が建ち、藤岡川合流部には、坂井時忠元知事の揮毫で『尋水望山※2』と刻まれた石碑（写真-11）が建てられています。その背面には、竣功当時の篠山町長・藤井正一氏の『藤岡川の流れに寄せて』が刻まれています。

ただ、新黒岡川に架かる２橋の橋名板は、なぜか「黒岡川」と刻まれています。

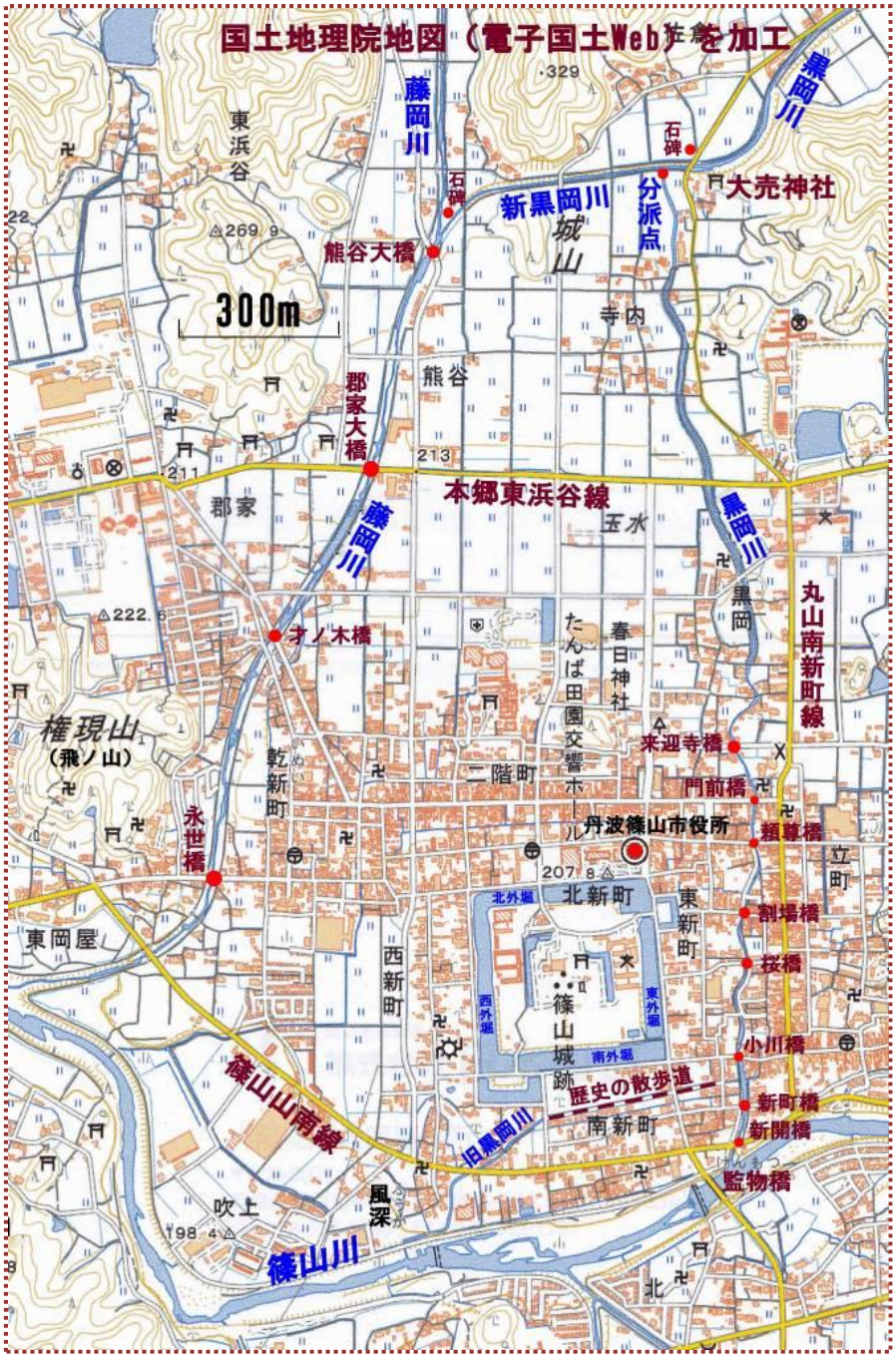

図-1 黒岡川治水対策関連の地図

※1 篠山川沿岸土地改良事業：昭和 41（1966）年に計画された多紀郡（現・丹波篠山市）内 2,090ha の農地を対象とした大規模県営かんがい排水事業で、この事業の中で４つの潅漑用ダム（鍔市ダム、八幡谷ダム、佐中ダム、藤岡ダム）が建設された。

※2 尋水望山：水を尋ね山を望む。景色の良い水郷を訪ね、山々を眺めること。山水を愛すること。

写真-11 『尋水望山』と刻まれた石碑

写真-12 分派点近くにある「新黒岡川」の石碑

藤岡川の流れに寄せて

昭和四十七年秋、建設省は上京中の小谷祐通篠山町長に藤岡川全面改修を併せ、新黒岡川を新設するとの治水利水の基本方針を発表、昭和四十五年東岡屋地内より順次上流に向かっての改修工事に着手、殊に昭和四十七年秋、当地域を襲った集中豪雨は、中・上流部の工事促進に一層拍車をかけた。幸い植田八郎県議をはじめ地権者等関係各位の理解と協力により、田畑を穿ち、家屋を移し、道を設け、橋を架して、ここに十有余春秋、圃場整備事業の進展とともに藤岡川全面改修、新黒岡川建設の悲願は遂に達成された。幾久しくこの地に住む人々が偉業をたたえ、晨（あした）に緑なす丹波の山脈を仰ぎ、夕べにはこのせせらぎに耳をかし、自然の大いなる恵みを享受しつつ、幸せ多い地域の創造を目指し、精進されん事を信じて止まない。万感の想いと感謝をこめて。

昭和五十六年　春

篠山町長　藤井正一記

■ 黒岡川の洪水流下を阻害していた樹木、堆積土砂を除去

令和２（2020）年２月５日付けの丹波新聞には、「70 代男性が河川に無断植樹 温暖化防止のため清掃妨害、恫喝も 洪水危険性高まり、県が伐採へ」といった見出しで概ね以下のようなことが書かれています。

「黒岡川の隣接地に住む70歳代の男性が、約20年前から無断で河川内に木を植えるなどの違法行為をしており、河川環境が著しく悪化。流下能力が低下し、景観だけでなく防災面でも懸念が生じている。長年にわたって住民から苦情が出ており、地元自治会長会も正式に対応を求めたことから、県は2月 19 日から樹木の伐採工事に着手する。

県はこれまでにも男性に対して対処を求めてきたが、地球温暖化を防いでいるなどと言って応じてこなかった。また、男性は以前から近隣住民に対して恫喝などを行い、清掃活動を妨害していたという。」

丹波土木事務所は令和２(2020)年２月、地元に工事説明をした上で、来迎寺橋から篠山川合流地点までの約 800m の区間において、高さ 3m 以上の高木約 50 本をはじめとして樹木を伐採し、河川内に堆積している土砂を除去しました。

写真-13 両岸に桜並木が続く新黒岡川

写真-14 分流吐口

写真-15 黒岡川への分流呑口

なお、黒岡川分派部に設けられていた幅 3.00m×高さ 1.35m のオリフィスは、諸般の事情から暫定的に上部に鉄板を貼り付けて黒岡川への分派量を減じるようにしていました（写真-15 参照）が、このままでは藤岡川に負荷がかかり過ぎます。現在構造の見直しを検討中とのことですが、この鉄板は早急に取り除いてほしいものです。

藤岡川上流にある藤岡ダム（写真-16 ロックフィル型式：堤高=43.4m、総貯水量=870 千 m^3）が、「既存ダムの洪水調節機能の強化に向けた基本方針（令和元年 12 月 12 日 既存ダムの洪水調節機能強化に向けた検討会議）」に基づく事前放流の一環として、令和２（2020）年度から期間放流（８月～10 月）に取り組んでいるとはいえ、この状態を想定してのものではありませんから。

写真-16 藤岡ダム

■ モノローグ

「歴史の散歩道」沿いに広がる雲紋竹の竹林。篠山盆地に 200 ヶ所ある雲紋竹の竹林の中で最大規模の竹藪だそうです。故牧野富太郎博士に「日本一の美竹」と賞讃された雲紋模様の竹を使い、竹細工を芸術の域にまで高めたのが、故箕浦竹甫（みのうらちくほ）氏で、その技術は丹波篠山市の指定無形文化財に指定されています。

この雲紋竹は、元は篠山城趾にあったものを廃藩置県の後、箕浦氏の祖父が「いつか篠山の新しい時代の名産に」とこの地に植えたといわれています。

【参考資料】

1 『篠山町七十五年史』 篠山町役場　昭和 30 年３月
2 『篠山城物語』 篠山市 HP
3 『丹波の竹の匠　箕浦竹甫さん～丹波篠山の有名人』 丹波篠山市 HP
4 『雲紋竹』 草花と樹木のデジタル植物園“Botanic Garden”
https://www.botanic.jp/plants-aa/unmont.htm
5 『丹波新聞』 令和２年２月５日

雲紋竹（うんもんちく）

イネ科マダケ属のタケ類。中国原産の「くろちく（黒竹）」の一品種です。桿に茶褐色の雲状の斑紋がはいります。丹波地方で多く栽培されているため、「たんばはんちく（丹波斑竹）」とも呼ばれる。京銘竹の一つとされ、建築用や工芸用に利用されている。

写真-17 雲紋竹

※発刊：令和４（2022）年１月 『ひょうご水百景』No.141
改訂：令和８（2026）年４月 『ひょうご水百景』No.141